ネルヴァルにおける罪障感と許しと治癒の期待

追悼　港道隆教授

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>篠田 知和基</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>23</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>95-103</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2016-02-29</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14990/00002821">http://doi.org/10.14990/00002821</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ネルヴァルにおける罪障感と

許しと治癒の期待

篠田知和基

ネルヴァルは周知のように統合失調症を発症し、当時有数の精神病院として知られた田島郡病院への入退院をくりかえし、四十七歳で首をくくって死んだ。その遺作「オー・リオ」では「自分は平生を破砕したのか」宇宙の調和を乱し、そのような罪の誘惑をかたりつつ、そこから超人的な努力をはらってたちらなおるプロセスを描いている。自己紛乱によって他者への関心をとりもどし、彼の罪のために失われた宇宙秩序が復活される希望をもって巻きもどすか死ぬかの選択をせまられたなどというように、刺戟的な罪障人に訛せさされなかったことによる。

しかし、それらがたんなる興味に過ぎないものを固定しようとしているようにみえるが、彼においては過去の思い出は必然的に罪の意識にうらされている苦しいものであると語っているのではなく、自分でもそれがこのましいものであるのかを思い出すように、語ることによって他者への関心をとりもどし、彼の罪のために失われた宇宙秩序が復活される希望をもって巻きもどすか死ぬかの選択をせまられたなどというように、過剩な罪障人に訛せさされなかったことによる。

そして、その罪をなんとか償って許しを得ようとしたものが、この自伝分析の書「オー・リオ」であった。
だるい不安を比喩的にかたまったものだろう。たま
にやっと水のにおいが鼻についたくらい、逃げな
ければならないというのはおげさである。問題は水草の花にあ
る。そこで水草の花が生えている川にそってあけてきた。
水草の花が生えている水草である。この「エルムノンウィ
ル」の章では「つかの間の花が星のようにち上げる」という言
い方をするが、水と星の結びつきは同じである。そのままから
夜の駅車が走っている街道の両側にリンゴの木の花がまる
で「地上の星」のように音立てて開くのをみてきた。地上の星、
水の星、そしていま城のまえでおなら水の星がひらくのをみた。
バリからここへくるまで、空の星が地上を巡り、執拗にいて
る。そんなにかおそしい、あるいはわがたい思い出
すついているのでないかと思われる。
どんな思い出だろう。むし、その城の前で、城の娘が月光
にたそられて歌うのを開いた。それを「イゲサのうえにあげ
どう鬼火」あるいは「あおざめた月の光にひらめく夜の花、パ
ラ色とブロンドの幻」と表れするのである。うつしい娘を
描写するのにつかわれる表現である。彼女はその「鬼火」を引
いた「夜の花」と抱き合って踊った。その「鬼火」がいまた、
どこが水草の花のあいかたちなものる。城の娘は彼とおどった
堀の水草の花のあいかたちのものを。
たという設定のドラマを演じたのだが、そこで地獄の天使を演じていたのが彼女だった。彼女はそれまでに亡霊の回帰のよう
じしていたのが彼女だった。彼はそれをすでに亡霊の回帰のよう
にかんじていた。その後、パリへもった彼は、しばらくまる
から接近をこころみている彼女にその話をする。彼女とその修
道尼が似ているというのである。彼女はつめたく言う。「女優
と修道尼が同一人物であるよう。ドラマでもありえない。そ
かの当の修道尼は死んでいるのである。修道院を抜け出す
することはなく、地獄を抜け出さなければならない。彼女が
をかけたとき、エルムソンヴィルで修道女の幻がたちあら
われるようになるのかを先に回避して、むかたのがロワジー
である。道は前年とおなじはずである。こんど彼は修道院
の前をあるいてロワジーへゆく。

同じ話を彼は幼馴染の村娘シルヴィにもする。そしてシルウィ
も同じ返事をする。彼女がシルヴィを解釈すれば、こうなるだろ

この人が私を愛してくれているのよ。シルヴィは彼にいなず
うと説くとするのである。シルヴィは彼にいなづけを紹
介する。「このひと、性に感じるのよ。彼女もまた彼にある男を紹介して言う。

彼女と村娘がおなじせりふをいう。修道女と女優ではなく、

そのシルヴィにいままで再会し、パリへ行って一緒にくら

と家族がおなじせりふをいう。修道女と女優ではなく、

今この人が私を愛してくれているのよ。シルヴィは彼にいな
ずけの男を紹介する。彼女もまた彼にいる男を紹介して言う。

彼女と村娘がおなじせりふをいう。修道女と女優ではなく、

この人が私を愛してくれているのよ。シルヴィは彼にいな
ずけの男を紹介する。彼女もまた彼にいる男を紹介して言う。

今この人が私を愛してくれているのよ。シルヴィは彼にいな
ずけの男を紹介する。彼女もまた彼にいる男を紹介して言う。

今この人が私を愛してくれているのよ。シルヴィは彼にいな
ずけの男を紹介する。彼女もまた彼にいる男を紹介して言う。

今この人が私を愛してくれているのよ。シルヴィは彼にいな
ずけの男を紹介する。彼女もまた彼にいる男を紹介して言う。
「シルヴィ」には「死ぬか生きるか」という場面はない。しかし

──「シルヴィ」は、まさに「死ぬか生きるか」という場面はない。しか

そこでいたるまで、説明があまり説得的ではない。「わたし

は深く悲しみにとらえられていた。それは愛されていないとい

う観念にほかならなかった。わたしは幸福の幻影のようなもの

を見た。わたしは神にあたえられた能力をすべて使い果たし

た。

そこでいてある。音のしない、波の噴出しない「爆発」である。「あえて

といえば、射精にいたらない発射のようにものともいえる。彼は

クリマ・クリスティという発泡酒をみすぎていた。パリの女

と似ている女をパリの女だと思って抱こうとして、思い違

いがついた。それに、彼女はパリの女だと思い込んでいた。

山へのぼって崖の上から海へとひらめく光を、妹のように感じ

ていた。自分自身を思いのままにしかなかった。彼女を

のままで、彼女をどうかがっかりした。自分は彼女にふさわしく

ない。もう一度と女を愛せたい、と決意した。彼女をとらえ

ての撤退は、フロイトも分析している。性交に前の撤退は、フロ

イトも分析している。性交を前にしての撤退は、フロイトも分析

している。彼女をとらえ、彼女をどうかがっかりした。自分

は彼女にふさわしくない。もう一度と女を愛せた。彼女を

のままで、彼女をどうかがっかりした。自分は彼女にふさわしく

ない。もう一度と女を愛せたい、と決意した。彼女を

のままで、彼女をどうかがっかりした。自分は彼女にふさわしく

ない。もう一度と女を愛せたりがついた。それに、彼女はパリの女

と似ている女をパリの女だと思って抱こうとして、思い違いに


ものがたりの最後に『シュリーゲ』とおなじセリフを主人公は口にする。「おそらくどこかで幸福をいっぱいだったのだ」。

そして『オーレリア』である。

「だれもが思いののちに痛切な懐想、長命のおさらしい打撃をもっているだろう。そのときには生きるか死ぬかどうかを」

「オーレリア」で語る手にしてから分析する夢のなかでは、彼の恋人が彼の恋する女、彼の愛した女、彼の分身、彼の恋する彼が婚約をあげるのだ。その場にみちびかれた彼はスキャンドルをひきおこす。もちろん、最初の狂気の発作のときとおなじに、みんながまちがっていると思い込む。問題になっているのは自分のほうで、もうひとりの男ではないということである。自分の夢は、彼の夢を夢にしてみた。」

自分の夢を夢にしてみた。「オーレリア」の最初の場面、発作をおこして置き所にいたりしていると、そこでもういちどにやってきた友人が、彼と同時に留まっていた男をつれてそこで出てくる。その男が自分を呼ぶ。「彼女はどこでこうしているのだろうか？」

「彼女はどこでこうしているのだろうか？」

「彼女はどこでこうしているのだろうか？」

「あなたの赤くやめた鉄の棒をもってきて彼をおだかす。そこで分身が自分の色をかえた。スキャンドルをひきおこした。おめめ、かつみで、」

「彼女はどこでこうしているのだろうか？」

「彼女はどこでこうしているのだろうか？」

「彼女はどこでこうしているのだろうか？」
「彼が田舎で生まれたことがわかったので、私は何時間も彼について歌うだった。ある日、どうさえ、一瞬のあいだだったが、彼の目があった。ちょうど夜が明けたので、お茶を飲むようになった。まだ食事も作れない、としやった言葉を、彼方からもどってくる『どこがわかった』といっていた。彼方、いまどこにいるんだい？と聞くと、一反自らに、と答え

この種の病気になるとこんな奇妙なことをお思いのもの。自分もサドルナも治療して、同時にたましいの救いさえ手

 rog こう。三人がならんで馬を天空にはらさせているのは、地上で
は三人が川の字になってともべッドにねている状態をあらわ
すだろう。一対一では不能にお立ちいる。それを分身のたすけで、
なおとか交性にあたりつ。いずれにしてもすぶりの高揚感
をあじわって天がけるところで物語はおわれる。

それをたんなる不能の治療としてではなく、統合失調症から
の治癒とみるなら、実際に起こったことは、このヘヴィ・サドル
ナに助けられたのではもなく、社会的価値としてもとの状態を回復したことにあるだろう。

サドルナはそれまで口もきかず、目もあけず、のみいて
拒否していた。しかし彼が一緒に時間をつぶしながら歌をうったり
たが、彼の目があった。ちょうど夢であったからわれわれの精霊とおなじ
のために村の古い民謡をうたってやっていった。（）うれしいこと
に彼がそれを聞いている様子がみられ、いくつのかの部分はあと
について歌うだった。ある日、どうさえ、一瞬のあいだだったが、彼の目があった。表はそのときから何日かたってから
青い目だった。ある朝、それはそのときから何日かたってから
ではなかった。目をおおきくひらいて、それから雨はもう閉じようと思
れではあった。わたしがかれると、したかい言葉を、

この種の病気になるとこんな奇妙なことをお思いのもの。自分もサドルナも治療して、同時にたましいの救いさえ手

自分もサドルナも治療して、同時にたましいの救いさえ手
C'est moi maintenant qui dois mourir... Le dernier des poètes...
『シルヴィ』にみられる主人公の不安（malaise）焦燥（angoisse）

いくつもの年の経過で、主人公の不安はより強まっている。主人公の不安の原因は、彼の過去の経験や現在の状況によるものである。

このあたりの地理については、ゲスト・シグネールの『メルタル・オブ・タイムス』を参照。

オーシャン、11. op. cit. p. 27. Vous ne m’aimez pas. Vous, attendez que je vous dise: la comédienne est la même que la religieuse; vous, cherchez un frère, voilà tout. et le dénouement vous échappe. Allez, je vous crois peu.

Oeuvres. 11, op. cit. p. 27. Vous ne m’aimez pas. Vous, attendez que je vous dise: la comédienne est la même que la religieuse; vous, cherchez un frère, voilà tout. et le dénouement vous échappe. Allez, je vous crois peu.

Nerval, et les Filles du feu, Nizet. 1956

Nerval, et les Filles du feu, Nizet. 1956
(…) Id. P. 413. (…) Tellons sort de ces idées bizarres qu’ont donné ces
(…) Ouvres. I. “D’maintenant au crois-tu ? En purgato